

平成 28 年度地域懇談会（西地域）

平成 28 年 1 月 27 日（日）

午前 10 時～午前 11 時 45 分

健康文化センター 多目的室

1 課題

「大口町消防団の現状と団員確保」について

2 対象地域

西小学校区（余野、垣田、さつきヶ丘、竹田）

3 参加者

地域（36名）

大口町

町長 鈴木雅博、副町長 大森滋、

地域協働部長兼町民安全課長 鶴飼嗣孝、岩崎課長補佐、兼松主査、

畑田主任、大胡田主事補

4 懇談会進行

総務部長兼秘書広報課長 社本寛

5 司会進行

秘書広報課 渡邊課長補佐

6 状況

町民安全課 兼松主査よりテーマについて説明を行い、その後懇談会を実施。
状況は以下のとおりです。

（町長 鈴木雅博 挨拶）

西小学校区は、大口町のビバリーヒルズかなと思っております。特に、住民の皆さんが多く、企業の少ない地域です。今日のテーマでは、消防団ということで、火事や災害等のお話をさせていただきたいと思います。余野地域は沢山の住民さんが住んでいらっしゃいますし、さつきヶ丘区があり、垣田区があり、小字ごとに形が少し違っている中で連携を取っていただく必要があります。

災害は一度にまいます。先週日曜日だったかと思いますが、池上彰さんのテレビをご覧になった方はいらっしゃいますか。その中で、日本全国の地図が出ておまして、有史以来、一度も水害を受けたことがない地域が出ていました。日本全国で 50 ほどの自治体があり、愛知県の中では唯一大口町は水害を受けたことがな

いようです。しかし、過去のデータは過去のもので、今後何が起こるかは誰も想像できません。このデータにあぐらをかくことは絶対にできません。水害以外にも地震で起きるであろう災害はありますし、家が崩壊したことでけがをした人などもあるかもしれません。こういう時に、誰が一つ一つの地域を助けてくれるのかということになると、もちろん警察、消防、自衛隊は必ず来るかもしれませんが、テレビなどで一番最初に出てくるのは、消防団の人達です。我々にとって一番身近なのは消防団です。

この中で消防団OBの方がみえたら拳手をお願いします。(2名拳手) 2人では皆を救えないだろうと皆さん思われると思います。今、消防団が抱えている一番の問題は、消防団員になっていただける方が少ないということです。これからは、本当に必要な、地域を良く分かっている消防団だけでなく、消防団の中でパートタイムのように動いていただける人を皆で作っていかねばいけません。各地域に自治組織がありますが、近隣地区の自治組織の境目をどうするかとか、垣田区のように住宅の多い地域では、住宅にどこに誰が住んでいるのか把握するのはなかなか難しいです。さつきヶ丘区では、高齢化しているといわれますが、これにどう対応するのか。余野区の新しい住宅では、連携がうまくとれていない部分も多くあります。大口町や消防団から色々とお願ひしたり、「避難してください」といっても、新しい家だから大丈夫だろうと思われる方が多くいらっしゃいます。これについても、テレビを見ていましたら、新築でも壊れる確率はものすごく高いそうです。建築基準は関東大震災から2回にわたって変更されています。東日本大震災を考えると、新しい家でもけっこう壊れています。なぜ、壊れるのかというと、直下率という計算方法があり、柱の数と壁の数や配置によって計算するようです。

新しければ大丈夫とか、古ければだめだ、ということではなくて、皆さんが受けてこられた耐震基準も少しずつどこかで変わってきておりますので、それもふまえて、皆様方にご相談をし、地域をどうしていくのか、地域の先頭に立って活動していただける消防団員を皆さんで一人でも多く増やし、災害時等に活動してもらって、地域の皆さんを守っていただけるようなそんな話し合いをさせていただきたいと思います。

ぜひご協力いただきたいのと、災害時には、人命救助の際にやっていいことと悪いことというものがあり、やはり分かっている人達にお任せするのが本当は一番良いです。消防では、日頃の練習の中でやって良いこと、悪いことを身につけていますので、そういう人達に練習をしながら地域を守ってもらえ、そんな活動の場を地域で作っていただき、メンバーを増やしていただき、一人でも多く安全に救い出せるよう考えていけるような場にしていきたいと思い、ご協力のお願ひをさせていただき、ご挨拶とお礼にかえさせていただきます。

○「地域懇談会」の趣旨及びテーマについて説明（副町長 大森滋）

さつきヶ丘と垣田には消防団はありませんが、過去、この2地域の若い方には余野の消防団と一緒に活動をしていただくこととなっています。今回のテーマについては、この3地域がともに地域の課題として捉え、議論に参加していただきたいと思います。

11月19日、北地域自治組織で防災訓練が行われました。北小学校で行われ、私も参加させていただきましたが、その中で、講師が「NPO 法人 神戸の絆2005」の専務理事 金芳外城雄（かねよし ときお）さんによる講演があり、災害時の自立共助が77%という話がありました。これは、地域住民の助け合いが命を救ったということです。

被災者164,000人中、自力で脱出できた人が129,000人、これは78%、救助を受けた方が35,000人おられましたが、警察・消防・自衛隊が救出した人が7,900人で23%、救助を受けた中の残りの27,100人は家族や消防団、近隣の人が救出したということです。自立共助が77%というのは、自力脱出が78%、消防団を含めた地域の方が協力して助けた方が77%になるということで、地域の身近な方と日頃から助け合うことが重要だと仰っていました。

大口町の場合、将来、南海トラフ大地震が想定されておりますが、大口町の想定震度は6弱～5強が想定されています。

これはどのくらいかということ、10月21日、鳥取県中部で地震が起きました。その中で、倉吉市で被害者が2,000人、隣の北栄町では避難者が140人というような大きな地震でしたが、ここが震度6～5強と、まさに大口町の南海トラフでの想定震度と同様となっております。海溝型の地震は被害が広くなるといわれているので、被災地は孤立を深め、なかなか救助の手が差し伸べられないのではないかと想定されます。

そうした中で、消防団の団員確保が難しい状況となっています。昭和20年代、30年代は農業が中心だったため、生活パターンや働き方が皆、均一でありましたが、現在は勤め先も勤務時間もバラバラという中で、消防団の活動がやりにくくなっていると感じています。

皆様方からご意見をいただき、消防団団員の確保、或は消防団の活性化についてご意見をお聞かせいただきたいと考えておりますので、よろしく申し上げます。

○ テーマについて説明（町民安全課 兼松主査）

○ 意見交換

(座長：総務部長 社本寛)

行政区によって消防団の状況は違います。昭和 10 年代のころの行政区が基本となって消防団ができていますので、今回は、おおむね余野の分団の方が、余野、さつきヶ丘、垣田の地区をカバーしていますので、若干消防団との関わりは他地区とは状況が違うのかなと思います。

大口町には丹羽消防組合という、お仕事で消防をする人たちがおります。何かあった時に全て対応できるようにと膨大な人数が必要となりますので役割分担があります。おおむね火を消すまでが仕事で、常時待機しているのが丹羽消防署です。火が消えた後に何かあるといけないからと、備えているのが消防団です。消防団は仕事ではなく、ご近所づきあいの中で、仕事で専門で関わってくれる消防署員を手助けする組織になります。消防団は地元の組織ですので、水害、人探し、台風の時にも役目を担っていただいています。

定員が 97 名、予防啓発女性団員が 10 名の計 107 名おりますが、今の時代、勤務地が遠かったり、昼間は抜けられないなど、時間や曜日といった条件で定員はいても、現場に集まれる人数が昔より少ないことなどがあります。ただでさえ団員の確保が難しい中、さらに動ける方が減ってきているということで、消防団は困っている状況です。

最初に、消防団の副団長さんから団の状況を説明していただきたいと思います。

(消防副団長)

この地域については、本当に感謝しております。年末夜警の際には、沢山の役員の方に出てきていただいております。6月の消防操法大会では町内9分団で争いますが、地域の大応援団でお越しいただき、その応援に励みようと団員も一生懸命練習し、2年連続優勝また、ここ5年の内3回優勝しております。団と地域の一つの理想的な形だと思います。

資料の最後のページを見て頂くと、余野分団は 20 代が 1 名となっています。我々はこの活動を伝承していかなければなりません。世代間の理想的なバランスをとっていきたいと思っています。

私達は、偏った考えになっているところがありますので、一般市民の皆さんに忌憚のないご意見をいただきたいと思います。よろしく申し上げます。

(座長：総務部長 社本寛)

組織は充実しているものの団員の年齢が高くなりつつあり、次へ引き継いでい

くのに少し不安があるようです。

(参加者 A)

2つほど気になったことがあります。一つ目は、町内企業の協力を得る必要があるということです。今年度、余野地区は、東久さんとオークマさんの余野の寮に地域との協力についてお話をさせていただきました。東久さんの場合は、若い方が少ないため、協力費はいただきましたが、他は難しいようです。オークマさんの課長さんとお話し、一度検討させていただくということでしたが、お返事がないので難しいようです。寮ですと若い方が多いので、3名程輪番で回していただければ、地域とのつながりも含め、若い独身のうちに地域活動のあり方の勉強のためにも寮を各地に1つおいていただけたらなと思います。

2つ目です。余野の分団の車庫は平屋建てですよね。大概、車庫の上に広間があり、コミュニケーションの場が求められていました。今は、各地の集会所にいったん集まらねばいけないので、車庫の上にコミュニケーションの場を設けていただければ、若者も集まりやすいのかなと思います。

(座長：総務部長 社本寛)

2ついただきましたが、まず企業の件について事務局お願いします。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

企業協力に関しては、昨日も、同じようなお話がございました。北小学校区で開催した際、オークマの方がいらっしゃいました。社員の方は、お住まいは大町外ですが、昼間でしたら町内にいらっしゃいますので、消防団員のいない昼間に協力いただけないか、という話の中で、「会社として総務課長に話をするので、今度一緒に行きましょう」と提案がありました。今年は企業に広報無線の戸別受信機を配布する予定ですが、配布する中で、色々な企業に協力を得られるよう話を進めていきたいと思います。

(座長：総務部長 社本寛)

先日、町内の大手企業をまわり、来年度予算を組むにあたり、企業の経常費について聞きに行った際、寮生の過ごし方について少しお話をしました。寮生の中で、ご近所づきあいと経験など、行っても良いと思っただけの価値観をお持ちの方がいれば、消防団へのお誘いも可能だというお話を提案としていただきました。

昨日、2回の地域懇談会の中で、町長から企業との連携についてお話があったかと思しますので、一度説明をお願いします。

(町長 鈴木雅博)

最近、41号線沿いの企業で火が出ました。朝方、会社に誰もいない時間帯にボロ布から自然発火したそうです。私の携帯電話に丹羽消防署から連絡が入りました。この会社に知り合いがたまたま居りましたので、家に電話を入れました。「会社が火事らしいが、行っているのか」と尋ねたところ、江南市在住のため情報が入らなかったため火事を知らず、現場へは行かなかったそうです。

消防署には、火事の際、施錠した入り口を壊して入る権限はあります。

燃えているものに水をかけて良いもの、悪いものがあります。昨日のオークマの話では、水をかけるとさらに火が大きくなる可能性のある機械や部品が設置されています。それを知らず、水をかけたために本来は小さな火災で済むものが大きな火災になってしまう可能性もあります。消防団の皆さんも初期消火の対応として水をかけてしまう可能性もあるかもしれません。大企業の中には、消防活動を行う組織を形成しているところもありますが、中小企業の多い大口町では、こういったことが分からないことも多々ある可能性があります。大きな企業では消防に携わる方もみえると思いますので、地元の消防の皆さんと企業の消防に携わる皆さんと相互に連絡を取れる形を作っていけると一番良いと思います。というのも、大口町は2万3千人の町ですが、昼間は、担い手といわれる多くの方は、名古屋などの町外に働きに出ており、火事があったことすら知らない方が多くみえます。逆に町外から大口町にお勤めにみえる方は、毎日1万3~7千人ほどいらっしゃいます。この皆さんのお力を借りた方が、絶対的に安全を守るために良い、もっと言うと、災害時、交通公共機関がストップしている中、町外にお勤めにいられている方は帰ってこられず災害難民となる可能性があります。逆に、町内で留まらなければならない方の内、活動できる元気な方達には地域で災害復旧のお手伝いをお願いしたいです。大口町は2万3千人の町ですが、昼間、町内に4万人の人がいる中で、職員はたった160人程しかおらず、町内にみえる方全てはとてもフォローしきれません。消防団や、地域自治組織などの皆さんの力を借りながらやってはいきますが、ぜひ町内でお勤めされている方にも住民の皆さんために動いていただきたいと思います。できれば消防団にも昼間だけパートタイムで参加していただくなど、色々な新しい組織も検討していく必要があるかと思いますし、皆様方からも様々な意見を頂戴したいと思います。

(座長：総務部長 社本寛)

先日、東久さんに伺った際に、地域の皆様方に企業活動においてご迷惑をかけているのではないかと気にしながらお仕事をされているとのことで、地域の皆さんと

今後連絡を取り合い、どんなことができるのか話し合うことが必要ですね、という話をたまたましました。

上小口地区ではトヨタ紡織さんと何かありましたよね。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

トヨタ紡織では、災害時、地域の皆さんの支援をしていただけます。工場内の食料・水の支給や一時避難先として提供できるという話をいただいているところです。

(座長：総務部長 社本寛)

企業さんと普段のコミュニケーションの中で、どんなことができるか話しをしていけると良いですね。

消防というテーマの中で、企業の方とお話をしたことは役場ではあまりありませんでしたので、今回良いアイデアをいただけたと思います。

企業関係で他に何かございますか。

(参加者B)

企業側にとってメリットのある方策はとられる予定はありますか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

今まで特にやっておらず、昨日、企業さんから協力いただけるというお話をいただいたことで、これから始めようと考えております。今できるものとして考えられるのは、一定以上の人数、消防団員の方を出していただくと、「この会社は消防団に協力的です」という看板を出すことができるという方策が全国的にとられていますが、基準が厳しく、従業員の1割程度が必要になります。これは除き、これから話し合いながら災害時、火災時にお互い助け合いましょうという趣旨で進めたいと思います。

(参加者B)

「こういうことが会社にとってメリットがある」ということが訴えられれば、より企業の方も動きやすくなると思います。

(座長：総務部長 社本寛)

まだこういった取り組みはできていませんので、どんな協力ができるのか、また、どこまではできないのか、今後話が出てくるかと思います。これからコミュニ

ケーションをとっていく中で、費用負担についてですとか、例えば、土木関係工事だと地域貢献の状況が点数化され、仕事を発注したりしますが、折り合いをつけながら仕組みを作っていくことは可能かと思imasるので、今回をきっかけにスタートしていければなと思imas。

(参加者C)

消防車など設備を所有する企業は多く在りますか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

昨日も話がありました、「消防団」については、企業の方とお話はさせていただいておりましたが、「火事」については消防署という別団体がやっているため情報があまりなく、昨日の反省として今後、消防署とも連携し、情報共有をしながらやっいていこうという話になりました。

昨日、東海理化の方に伺いましたが、建物自体に消火設備があり、これである程度対応できるようですので、消防車は所有しているところは少ないようです。

(座長：総務部長 社本寛)

せっかく以前、消防を担当されていた丹羽広域事務組合の職員の方がいらっしやいますので、少しお話を伺いたいと思imas。

(丹羽広域事務組合 職員)

今、私は水道を担当しているため、消防については随分と離れておりますが、経験からお話させていただきます。今、消防車を所有している企業はございません。企業の中にある消防設備を使った初期消火の訓練をおこなっていただいております。企業の中で、自衛消防隊を作っております。年に1回消防署で消防車を使ったホースの結合など、統制のとれた訓練ができていのではないかとと思imas。企業との協力はなかなか難しいとは思imasが、これから消防署と役場の行政がコミュニケーションをきちんとはかって地域にどれだけ貢献できるのか、これからの課題として持ち帰って消防長にも伝えようと思imas。

(大口町長)

今の話を訂正させていただきますと、昨日、オークマさんがおっしゃっていたのは、消防車ではなく、消防本部を別でもっていて独自で毎年放水訓練をおこなっているということでした。消防庁舎を持っている会社は、三菱重工業のロケットを作っている飛島工場くらいしか見たことはありません。火を使う仕事のため、仕方な

く2台おいてあるということでした。大口町の中で火を使う会社は少ないものですから、提携を結ぶにしてもどういう形でおこなっていくかは時間をかけて検討していくこととなります。

すぐできることは、人材をいかに貸していただけるかということを目的として考えていかねばならないことだと思っておりますので、ご理解をしていただきたいと思います。

(参加者D)

お話の続きになりますが、東久では、工場内を移動する可搬式のポンプ車や防火用水槽を持っており、消防署が年に数回水位の確認にきています。こういったものも、地域の火災時に有効に使えるのではないかと思います。

(座長：総務部長 社本寛)

火災の水の不足時などに、こういう場所にこういうものがある、と企業等が持っており、お借りできるものを把握しておくだけでも違うと思います。今後、企業とコミュニケーションをとっていくということですので、意見の一つとして承りたいと思います。

消防団のお付き合いの際に、昔ですと夜警の暖をとるようなコミュニケーションの場があったということですが、その辺りどうでしょうか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

消防団のコミュニケーション及び消防車庫の話かと思います。昨日は、消防団の数、車庫の立て直しといった話がありましたが、もし今のままで消防車庫の構造を変えようとする、9個全て変えねばいけません。それを含め、分団の数等を今後どうしていくか検討していきたいと思います。そんな中で、コミュニケーションという話になると、昨日女性消防団員が来てくれましたが、現在、女性消防団は本部付けとなっており、チラシづくりなど作業をする場所がなく、今は役場防災倉庫の2階で作業してくれています。やはり皆で集まって話し合いのできる場所が近くに欲しいという話をいただいておりますので、消防車庫など色々なことを含めて今後検討していかねばならないと思います。

(参加者E)

消防団をセミプロ化するのはどうでしょう。年間報酬を10倍くらいに引き上げ、契約社員のような形をとって年間契約をして、その間は消防団に主力をおいていただき、期間が終了したら他の仕事に従事してもらおうという形にした方が早い

と思います。色々、企業にお願いすると、財政的にも町に負担がかかりますし、どうせなら個人に、消防団そのものにお金をかけた方が早いんじゃないかと思いたすがいかがでしょうか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

昨日も話がありましたが、職業として消防していただくのは、消防署職員がおります。当初から話していますが、消防団に担っていただくのは、大本の火事を消すのではなく、その周りの交通整理ですとか、大きな火がある程度収まった後の、延焼防止の作業です。また、災害時の救援などもございます。これをセミプロのように扱っていいのかというのがありますし、災害時は、選択肢が色々あった方が良く思うんです。災害は、どんな状況になるかも分かりませんので、色々な選択肢の中で、その時の判断でいかにどんな種類の方を使えるかという形であった方がいいと思いますので、機能的にはお金を払ってお願いするというよりは、「やらなければいけない」という思いで来ていただいた方が実践的だと思います。

(参加者E)

趣旨はそうですが、ひょっとしたらそこまで広げる方が、人は集めやすいかと思っただけで、根底から変えるようなつもりはありません。ある程度、契約社員という形でもって、「お金もらえるから少し協力しようかな」という思いで参加する方がいても不思議はないと思います。

(座長：総務部長 社本寛)

一つの案として、アイデアをいただきました。

一方で、災害がいつ起きるか分からないというところからすると、どう待機するのかという課題としては出てきます。役場職員が消防団員もある程度役場の中におりますが、いざとなると役場の業務もあり、受け入れていくのにも限度がありますので、幅広い選択肢をもっておくことが大切なのかと思います。

(参加者F)

災害はどんなことが起きるか分からないということですが、神戸震災等で起きていることは火災です。火災が発生して、少ない消防団の方が一生懸命対応しても手が付けられないということで、大口町でも一時的に火災発生が予想されます。丹羽消防署の職員と消防団の皆さんで、町内各地で発生する火災をフォローできるかと考えると、大切なのは消防の知識を持った人を増やすということの方が、消防団員の確保より大切ではないかと思います。

西小学校のスクールガードに参加しているのは 70 代がほとんどです。地域の高齢者が、災害時、活動に関われるような知識を与える場や、「消防予備隊」のような組織を作るのはどうでしょうか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

昨日、同じようなご意見をいただきました。昨日までは消防OBの方が出席されており、体力のいらないような作業なら手伝えるというお言葉をいただきました。また、機能別の消防組織を考えてはどうかというお話をいただきました。先週、遠野市に出掛けさせていただきました。大口町は人口 2 万 3 千人ですが、遠野市では人口が減っており人口 1 万 8 千人の中で消防団員は 800 名いるということでした。なぜこんなに多いのかというと、皆さんは、災害時、隣近所を助けに行くという機能別消防団に手を挙げていただいているということでした。色々な種類があった方が良いと思います。19 日、北地域の避難訓練があった際、職員も参集や情報収集等の訓練をおこないました。実際やると、マニュアルとおりにはいきません。部長が住民役で内線を使い電話対応をおこないましたが、うまく対応できませんでした。現在の計画ですと、災害時、町民安全課職員が一番に集まるとなっておりますが、実際は随時集まったメンバーが自分たちで考えて、誰か指示をして動いていかねばなりません。ですので、訓練等は必要になってくるとは思いますが、災害時は消防の手助けを様々な団体に担っていただけるよう、多くの選択肢をもち、対応していきたいと思います。今回のご意見を今後、参考とさせていただきたいと思います。

(座長：総務部長 社本寛)

今の消防団員ですと、色々な仕事を沢山担っていますが、全て団員で担うと大変ですし、昼間町内にいる方で、交通整理など一部だけなら担えるような方々を組織として役割を分担して団を作りましょう、ということで「機能別」という言葉を使っています。色々な方々のお力を借りながら、ということです。

神戸は、密集しており、真冬で水が無かったということもあるみたいですが、どんどん燃え広がっていったようで、神戸市は組織も大きいですが、町も大きいため、とても消防が間に合わなかったようで、そういう状況ですと、色々な人のマンパワーを借りることが重要となってきますので、あってはならないことですが、備えとしては必要なのかなと思います。

(参加者 F)

3点お願いがあります。

1点目は予備隊の関係です。私は警察におりますが、機動隊の他に短期機動隊、これらに対応できない場合、第二機動隊というのがあります。要は予備隊です。予備隊の考え方は有事の際に必要なかと思えます。OBもそうですが、プラスして消防団の未経験者による予備隊の編成が必要になってくると思えます。若い人がその活動を見て、消防団に入ってくる可能性もあると思えます。

2点目が、消防団員による消防活動の講習会です。各地区の消防団員の方に自覚・自信を持っていただく、それから、広く広報を行うことです。我々は放水をやれと言われましても、なかなかできません。消火栓があっても使えません。ですから、消防団員の方に自覚を持っていただく形で、消火栓を使った放水訓練ですとか、災害に関する訓練をすれば、消防団の広報にもなりますし、新たな後継者育成につながると思えます。

3点目は、若い人の情報が、個人情報の絡みもあり、分かりにくくなっています。町から消防団関係者へ、若い人の情報をお知らせする、それから、各所で分かっている情報を伝えていくことが必要だと思えますが、個人情報保護の関係もあり難しいかもしれませんが、この辺りはどうでしょうか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

予備隊のお話ですが、機能別団員の1つかと思えますので、今後話を進めていきたいと思えます。昨日もこういうお話がありました。懇談会が終わった後に区長さんなどとお話をしていると「自分たちがやれば、子どもや孫がみて、ひよっとしたら消防団に入ってくれる機会になるのでは。」とおっしゃっていただきましたので、今後、積極的に考えていきたいと思えます。

消防団による消火の講習会についてですが、講習会という形ではありませんが、各消防団ごとで、区の防災訓練の中で、見本を見せていただいているかと思えます。北地域の防災訓練では、災害時の火災について初期消火訓練ということで、消防団の指導の下、訓練が行われました。余野分団にも一度確認させていただきます。

若い方の情報ですが、昨日は、現役の消防団員から話がありました。年齢別の一覧表を見て頂きますと、20代の消防団員がほとんどいないため、どこに誰がいるのかわからないという状況が消防団の中にあります。また、個人情報の観点から役場からリストを渡すわけにもいきません。昨日の現役消防団員の話では、皆さんから、「若い方が近所に住んでいる」という情報を消防団員に欲しいとのことでした。情報をいただければ、自分たちで話をしに行くので、災害時、支援を受けたいなら、地域の皆さんから「近所にこんな若い子がいるよ」という消防団員の候補を教えて

ほしいとの話がありましたので、皆さんから消防団に提供していただけると一番ありがたいかなと思います。

(参加者F)

ありがとうございました。私が行った講習会では、バケツリレーなどの初期消火について丹羽消防署にお願いをして、毎回おこなっています。去年は、衣類を使った搬送など、搬送訓練をおこないました。今回、消防団にお願いしたいのは、ホースを使った消火です。消火栓を使った放水訓練や、簡単な救助訓練といった消防団の皆さんが受けた内容だけで結構ですので、講習会を開催すれば、もっと消防団が身近なものになると思いますので、ご理解をお願いします。

(座長：総務部長 社本寛)

団員が講師になり、消防団員にこういう場をつくることで、地域の方と距離を縮めたり、人によるとは思いますが、やりがいになる場をつくるというイメージですね。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

消防団長にご意見を頂戴したいと思います。

(消防団長)

昨日、今日と活発なご意見をいただきありがとうございます。今の話とは少し変わるかもしれませんが、消防団では、魅力ある消防団をつくろうと、バーベキューを開催したり、ボーリング大会を開催したりと団員の中で沢山のコミュニケーションをとらせていただいております。皆さん地元に戻られましたら、「消防団では、消防だけでなく、けっこうおもしろいことをしているよ。」と吹聴していただければ幸いです。

先ほど、地元に来てほしいというご依頼をいただきましたが、現在、南地域では、10名程の女性消防団員からなる予防啓発団員がおります。今後は、南地域だけでなく、各地域で作っていただきたいと思います。彼女たちは啓発を主に活動しておりますので、そういった講習を受けております。講習会等により、女性たちの活躍の場を広げていただくのもPRにつながりますし、それを見た若いお母さん方が、「私達も入りたい」と言っただけのかもしれませんが、「消防団は、きつい、きつい」というイメージしかありませんが、実際、中に入れば、若い者は若い者でまた、横の連携、縦の連携でやっておりますので、よろしくをお願いします。

(座長：総務部長 社本寛)

団員確保の情報提供という話がありましたが、自分も経験がありますが、「消防団を辞めなければ、後任を探せよ」というような、一旦、受けた故に自分の責任と感じてやっている団員もいるんだろうなと想像します。後任を探せないから、自分が団員を続けるしかない、長くやればやるほど、年を取るため、知り合いは減っていきます。そういう中で、ある区では、消防団員の確保を区の課題として捉え、区長、区会議員あたりが団員と一緒にになって新たな団員を探すということを区の中で広めていかねばいけないと、1年検討したという話もありました。

また、分団を小学校区に1つとしたらどうかという話もありましたが、この西小学校区はたまたま、小学校区に余野分団が1つあるという状況です。団の方々との皆さんと交流をとりながら、団を支えていただければと思います。

(参加者G)

資料の中で、2月に「大規模災害訓練」とありますが、内容をお聞かせ願えますか。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

内容としては、消防署が主体となっている訓練に消防団も参加しているものです。去年は、扶桑町の工場の中でおこないましたが、今年は東海理化の中で一緒に訓練をおこなう予定です。

(参加者G)

町で毎年9月ごろに防災訓練があったかと思います。その中で集まるのは、消防署、消防団、各自治区の防災会、関係機関だったかと思います。東海市の方ですと、市内企業の参加も得て、地域と企業が連携した防災訓練が行われています。できれば、各地域の住民さんにも防災訓練を周知いただき、住民の方が参加し、その関係機関、町内企業にも知っていただければ、消防団の訓練も見えて頂けるでしょうし、消防団のPRにもつながるかと思います。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

まず、防災訓練ですが、以前は、イベント的な防災訓練をおこなっていましたが、最近では、実際に即した訓練をおこなっていかうと考え、始めております。いきなり全ての事を行うことは難しいので、今年については、職員の参集、避難所が安全かどうかの確認、避難所の受付といった入り口部分を北地域の方達とおこないまし

た。今後、職員についても、情報を収集をするところまでは行いましたが、どういう風に分けて、どう動いていくのか、今後、順次、範囲を広め、場所も色々変えながらやっていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

(参加者H)

設備についてお伺いします。余野二丁目、三丁目、四丁目などの古い地域には、簡易消火栓が設置されていますが、新しい地域については設置されておられません。災害時の火災は、初期消火が大切になるかと思いますが、新しい地域には設置されていませんが、簡易消火栓に対する基準ですとか基本的な考え方についてお伺いしたいです。また、上小口等新しい住宅街などに対する指導や考え方について分かればお伺いしたいと思えます。

(町民安全課 兼松主査)

45の細い簡易水道の事かと思いますが、これについては新しく設置できないと聞いていますので、今あるものを大事に維持していただくこととなります。なぜ、設置できないのか理由については分かりかねます。

上小口などの新しく沢山できた住宅地については、65の大きい道路に埋め込み式のを、協力いただき1ヶ所整備しています。基準としては、消防の消火栓や防火水槽から120m範囲に住宅がくるような形で水道管の太さも関係してきますが、整備しています。

(座長：総務部長 社本寛)

簡易消火栓はいつから設置できなくなったか聞いていますか。

(副町長 大森滋)

簡易消火栓が新しく設置できないという話が町民安全課からありましたが、かつて消防を担当していたとき、「簡易消火栓を廃止したい」という話が、当時の水道企業団、今の丹羽広域事務組合水道部から話がありました。皆さん簡易消火栓を開けることが出来る為、それを普段、自分の洗車などに使ってしまふことがあったからです。廃止にはなりませんでしたが、新しく設置することはなしになりました。当時は、阪神淡路大震災や東日本大震災を経験する前の話ですので、これらの震災の経験を踏まえますと、簡易消火栓の整備も必要かと個人的には思いますが、具体的に決断し、町の課題として挙げるまでには至っていません。今日、お話を伺う中で、丹羽広域事務組合とも話す中で、新たに設置できるか考えてみたいと思えます。

(座長：総務部長 社本寛)

おそらく簡易消火栓では、径が細いため、水を飛ばす水圧を持ってないということもあり、先ほど副町長 大森滋の言った理由もあり、消火栓を配りながら、道路に埋め込み式で消防団がジョイントして使えるものと防火水槽を、消防団のホースをつなぎ、半径を描きながら、不足のないように整備をしてきているというのが経緯かと思います。副町長 大森滋の話にもあったように、これを新たな課題として、協議をしていきたいと思います。

(参加者H)

今の答弁の中では、簡易消火栓が不必要だという考え方のもと、現在に至っているように思います。阪神淡路大震災などを見ていると、たしかに能力は小さいかもしれませんが、消火器よりは役に立つと思いますし、地震等で起きた火災では、消防車の数も足りないことが想定されますし、簡易消火栓は必要性があるかと思いますので、一度検討をお願いします。

(地域協働部長 鵜飼嗣孝)

実際、消防署に確認しますと、災害はいつ起きるか分かりませんので、災害発生時にその場にいる人員ですぐに出せる消防車は2台までです。大口町、扶桑町含めて2ヶ所までは消防車は行けませんが、これ以上は、災害発生後、消防署員が集まってからしか消防車は行けません。やはり初期消火については、再度見直しが必要かと思いますので、今後検討させていただきます。

(町長 鈴木雅博)

皆さんから貴重なご意見をいただきありがとうございます。役場職員、消防団員、消防署員だけでは2万3千人の住民さんの命や財産を守ることはできないと考えざるを得ない情報が色々入ってきております。できるだけことはやっていますが、さつきヶ丘区区長さんはお勤めになった警察機動隊の経験をもとにお話いただきましたが、皆さん多くの経験を踏まえまして色々なお知恵を出していただいております、我々が想像もしなかったお話をいただいております。早急に町民安全課でまとめさせていただき、施策に取りこんでまいりたいと思いますのでよろしくをお願いします。

簡易消火栓の話がありましたが、我が家の近所にも簡易消火栓があります。この前、中を見てもみると、ホースはあっても頭がありませんでした。何故かという、頭は銅でできているため、お金になるということで盗られていたのです。いざとい

う時にない、という事態になりかねません。地域に預けているものですので、地域の皆さんで点検していただきたいと思います。

若い人がいない、という話になりましたが、新しく家を買って、転入している方の中では、区費も払わず、区にも所属せずに自分達の言い分だけを言う人もいるかもしれません。この間、笑い話になりますが、畑で野焼きをしていた方がおり、新しく家を買った方が、「俺のカッターが汚れてしまう」と文句を言いにみえたそうです。しかし、農業法や農地法では、自分たちの畑で出た枯葉などは自分たちの畑で燃やしても良いという許可が出ているということは確認しています。そのようなことも知らず「俺のカッターが汚れてしまった。どうしてくれる。すぐ警察呼ぶぞ。」くらいのことを言われる方も中にはおります。地域の中でそれぞれ認めてきたことが総崩れになる可能性もありますので、元から住んでいらっしゃる住民の皆さんの色々な意味でのパワーが必要になってくるかと思えます。いざ、災害が起きた時、この若夫婦たちは、どこに行ったらいいかも分からない、何をやっていいか分からない。しかし、口は達者ですので「何もしてくれないじゃないか」と言われ、住民の皆さんが一生懸命やっても、彼らがそれを知らないとなると大変なことになると思います。ですので、ぜひ地域の色々な事業にも参加してもらい、その中で、消防団活動に関心を示す方もいるかもしれませんので、若い方達を巻き込み、区、小字の中で協力を賜れるよう調和をとった形での地域の生活・安全を考えていただけることを心からお願い申し上げます。

皆さん方からいただいたご意見をまとめ、参考とさせていただきます。

(座長：総務部長 社本寛)

今日のまとめをさせていただきます。企業との連携という中で、企業の持つ人や物といった資産を把握しながら、いざというときに使わせていただくことができないうか、これに伴い、企業にもメリットを考えたらどうかというご意見、団員をセミプロ化したらどうかというご意見、年齢が上がった中で、少し時間があるのでやれることはやるよという話の中で、機能別、役割を分担しながら組織を見直したらどうかというご意見と、そこには、組織体制についても兼ね合わせて検討すべきなのかなと考えました。そして、団員が活躍する場を提供することにより、地域の方達との距離感を縮めたり、団員のやりがいにつながるのではというご意見、また若い人の情報に関するご意見、簡易消火栓も、色々な経緯はあるだろうが設置等を考えてもらえないだろうかというご意見など、いただいたご意見を町の方で反映しながら、地域の皆さんといざという時のことを考えていければと思ひ、この会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

(副町長 大森滋)

皆さん、長時間ありがとうございました。西小学校区については3回目ということで、お話をいただきました。南小学校区では、消防団を小学校区単位にしてはどうかという話がありました。また、女性消防団員について、活動拠点の確保と、「ミッションが分かりません。啓発だけで良いのですか。」という話があり、察するに、消防団の実態的な活動にも携わってみたいのかなと思いました。次の北小学校区では、OBの活用や、機能別消防団員の検討をしたらどうかという話をいただきました。また、スポーツクラブなどの色々な団体に、災害時に対応していただけるよう普段から説明をしたり、訓練をするなど、団体をお願いしてはどうかというご意見をいただきました。あるいは高校に入団案内をしてはどうかという話もありました。今回も、話が出ましたが、機能別消防団やOBからなる消防団を支援する団体が出来ても、消防団員として仕事を引き継ぐ、世代がなかなか入ってこないということで、後輩を確保するという点から、若い人のリストを出してほしいという話が現役団員からありました。西小学校区でも話がありましたが、町としてなかなか出せませんので、区が把握している情報を出していただけると、団員確保に動けると思いますので、よろしくお願いします。今回の西小学校区では、特に企業との連携についてかなり突っ込んだご意見をいただきました。企業の協力を求めるという話になると、企業にもメリットが必要になってくるのではないかと、あるいは消防予備隊としてOBだけでなく未経験者も入れていく必要があるのではないかと、消防団のセミプロ化という話は発想の転換として参考とさせていただきたいと思います。以上が、この三日間のまとめになります。